Tokyo Jogakkan News
東京女学館ニュース
No. 30
平成23年5月25日 発行

CONTENTS
ご挨拶
館長・理事長　福原 孝明
◆東京女学館の歴史
小学校
中学校・高等学校
大学

〒150-0012　東京都渋谷区広尾3-7-16
TEL.03-3400-0861　FAX.03-3400-0866
東京女学館 広報委員会　URL：http://www.tjk.jp/

ご挨拶

館長・理事長　福原 孝明

この度の東日本大震災により、お亡くなりになられた方々に心よりお悔やみを申し上げますとともに、被災された方々に謹んでお見舞い申し上げます。被害にあわれた皆様の生活が一日も早く復旧されることを心よりお祈りいたします。

3月11日の大震災では、幸い、小、中高、大学とも児童・生徒・学生はもちろんのこと、校舎等にも被害はありませんでしたが、余震や計画停電の影響などの困難な状況の中、中学校では、3年生のみによる卒業式を挙行しました。4月第2週以降交通機関がほぼ正常化する中で、小、中、高では入学式、始業式を無事に行うことができました。

また、大学では卒業式、入学式を中止し4月5日より新入生を迎えて新年度がスタートしました。おかげさまで、今年、大学は開学10周年を迎え、少子化が進む中、さまざまな取り組みを進めてまいりました。それを一層進め国際教養学科の教育内容をわかりやすくするとともに、学生が将来の目標に合わせて教育内容を選択できるよう、今年度は次年度以降に向け「英語圏留学」「アジア圏留学」「国際交流」「ビジネス」「認定心理士」「教職課程」の6つの学びのプログラムを準備しています。学生は主プログラムとして一つ登録しますが、さらに意欲のある学生は、副プログラムを追加選択でき、きめこまかく学生の成長を支援する教育を展開します。

どの子も子どもは星
みんなそれぞれがそれぞれの光をいただいて
まばたきしている
ぼくの光を見てくださいとまばたきしている
わたしの光も見てくださいとまばたきしている
光を見てやろう
まばたきに応えてやろう
光を見てもらえないと子どもの星は光を消す
まばたきをやめる
まばたきをやめてしまおうとしはじめている星はないか
光を消してしまおうとしている星はないか
光を見てやろう
まばたきに応えてやろう
そして
やんちゃ者からはやんちゃ者の光
おとなしい子からはおとなしい子の光
気のはやい子からは気のはやい子の光
ゆっくりやさんからはゆっくりやさんの光
男の子からは男の子の光
女の子からは女の子の光
天いっぱいに
子どもの星を
かがやかせよう

この詩は、東井義雄氏の「どの子も子どもは星」と題した作品で、東井義雄氏が最も大切にしていたものです。

教育の本質は一人ひとりが備えている可能性に気づき、精一杯努力することに周囲の者が寄り添い、励ましあいながらその子の成長を育んでいくことと思います。本校でも、そうした実践を数多く積みあげられるよう真摯に取り組んでいきたいと願っております。

本年も皆様の益々のご支援とご協力をお願い申し上げ、私のご挨拶といたします。

東京女学館の歴史

鈴木　須磨子　旧姓 辰野　明治三十四年 第十回卒業生

本学の卒業生には学者の夫人としてその生涯を全うされた方が少なくない。ここに取り上げるのはビタミンBの発見者鈴木梅太郎の妻として博士死後もその業績の顕彰につとめた鈴木須磨子である。夫のみならず、彼女の父は日本銀行本店や東京駅の設計をした辰野金吾であり、彼女の弟辰野隆は文芸批評家小林秀雄らの俊秀を育てた東京大学文学部仏文科の名物教師として知られ、彼女は学者一家の出身であった。

鈴木須磨子は一八八四(明治一七)年十月十七日、東京市赤坂区台町に佐賀県士族辰野金吾、母ヒデの長女として生まれた。辰野隆によれば、母ヒデは「極めて平凡な女だった。貧乏士族の娘で、教養も高からず、世間普通の女の持っている美点と短所とを分担していた」という。父金吾は唐津藩士姫松倉右衞門の次男で、叔父辰野宗安の養子として育ち、工部省工学寮に入学、工部大学校造家学科に転じてコンドルに教えを受けて英国ロンドン大学に留学、建築学を修めた人物である。晩年、漢詩や俳句を嗜み、浪花節を愛する歳月を送ったが、死の床にあっては万歳を連呼して愛国の意志を示し、家族のみならず集まった人々に挨拶して大往生を遂げたといわれ、辰野隆は亡き父を「実に彼は男なりき、善き父なりき」と賞揚している。ここには明治の家族の姿が彷彿とさせられる。

須磨子の生まれた当時の赤坂辺について、辰野隆は「赤坂に生まれ赤坂に住み、毎日四隣の兵営から鳴り渡る起床喇叭で目を覚ましし、就寝した」と書いているから、恐らく姉須磨子もまたこのような幼少期を送ったことであろう。一八八七(明治二〇)年より一八九〇(明治二三)年まで芝幼稚園に通い、同年三月、東京市立仲ノ町高等尋常小学校に入学し、高等一年次まで通っている。本学普通科に入学したのが一八九六(明治二九)年八月末のことで、一九〇一(明治三四)年に卒業している。

卒業後まもなく須磨子は結婚した。夫鈴木梅太郎は静岡県堀野新田村の出身で、農科大学農芸化学科を卒業して、後に農学博士となった人物である。結婚後すぐに文部省留学生としてドイツ・フランス・スイスを歴遊し、ベルリン大学ではフィッシャーに師事して蛋白質の研究に没頭。帰国後、盛岡高等農林学校教授兼東京帝国大学農科大学助教授に就任した。この間、結婚の翌年には長女久仁子が生まれ、帰国後は盛岡で生活していたが、一九〇九(明治四二)年に渋谷区宇田川町に転居し、住まいが近いということもあり、娘を東京女学館に入学させている。

辰野家の気風であろうか、須磨子はなかなかに開放的で、率直な人と見え、戦後まもない一九五一(昭和二六)年の本学六十二周年記念式典で、戦後ずっと彼女の家の別荘に勝手に五年間も住み込んでしまったクラスメートのことを披露して、どうかそのような図々しい人にならぬようにと在校生に話している。「七日許と言いて宿りし其人は去らずして已に五ツ年を住む」とは学園誌『菊』に掲載された彼女の短歌である。夫梅太郎は一九四三(昭和一八)年九月、文化勲章を受章してまもなく亡くなったが、須磨子は曾孫にも恵まれた晩年を過ごし、一九五二(昭和二七)年六月十一日に逝去した。

川上 哲正(史料編纂室)

子どもに意欲をもたせる秘訣

小学校長　三原 徹

「はえば立て・立てば歩めの親心」と昔からいわれますが、親にとって我が子はかけがえのない宝ものですし、成長は何よりの楽しみです。大切に慈しみ、育てていらしたお嬢様です。家庭と学校が車の両輪として、お嬢様の教育にあたっていきたいと念じています。

今日は、熱心さのあまり子どもをだめにしてしまっている例をご紹介して、望ましい親のあり方について考えていただくきっかけにしていただきたいと思います。

『三過（過保護・過干渉・過期待）は子どもをだめにするもと』

子どもの言動を見ていると、じれったくなったりハラハラしたりすることがたくさんあります。母親の言葉で一番多いのは、「早くしなさい」であるともいわれるのも一理あります。しかし、子どもは自分の手でやってみて、成功したり失敗したりする中から育つものです。「聞いたことは忘れ、見たことは覚え、やったことは身につく」といわれるゆえんです。危険な行動以外はできるだけ我慢して、口出しすることは控えたいものです。

子どもが欲しがるものは何でも買ってあげることが、子どもを大事にすることと考えてはいませんか。今必要かどうかをきちんと話し合い、必要でないものは我慢させるという「我慢のしつけ」は成長の良薬です。また、保護者の考えによって友達を選ぶということはありませんか。子どもは、時にいじめられたり、泣かされたりする悔しさの中から強さや、人とのつきあい方が身についたりするのです。最後の例ですが、点数にこだわって「100点を取ったら○○を買ってあげる」とか、つきっきりで宿題を見てあげるとか度が過ぎるのも考えもので、子どもは自分から進んでという意欲を失ってしまいます。「言って聞かせて、やってみせ、させてみて、ほめてやらねば人は動かじ」という山本五十六の言葉をもう一度、深く味わってみたいものです。

昨年度の行事から

●展覧会

2月19・20日は2年に一度の展覧会でした。今年は昇降口いっぱいに全校児童で描いた『TJK鳥獣戯画』を展示しました。5年生がまず鉛筆で動物を描き、その背景を墨汁で描いて、たくさんの動物がいろいろなことをしている楽しい絵ができあがりました。そして、その作品を1～6年生が色鉛筆で色ぬりしました。いままでぬったどのぬり絵よりも大きく、子どもたちは全身を使い、ぬり絵を楽しんでいました。「ここ、私が描いたの！」と指をさしながら、お父さま・お母さま方に見せる様子はとても微笑ましく感じました。児童はひとつのものを全校児童で作り上げる達成感を味わうことができたはずです。またこの作品を展示した空間にパワーが溢れていたことも感じることができたと思います。

今年は『TJK鳥獣戯画』によって、例年にも増してパワフルな展覧会になりました。この行事を通して、ひとりひとりの個性がこれからも、もっと輝いていくように願います。

●卒業式

大地震の影響で、春の訪れを感じる余裕が持てない日々が続きました。余震や交通機関への影響もあり、式の直前にも関わらず休校になるなど、卒業式ができるのだろうかと不安でした。社会全体が落ち着かず、困難なことも多い状況の中、ご来賓の方々・5年生・保護者の皆様のご列席を賜り、予定通り18日に、第77回卒業式を挙行することができました。

たくさんの方に見守られ、卒業証書授与の時には、校長先生が一人ひとりに声をかけて下さり、心温まる節目の式となりました。

77名の卒業生は、いつにも増して、卒業の喜び・巣立ちへの期待と不安とともに、普通の生活ができることや周りの人への感謝の気持ちを強く感じたことと思います。当日の朝は、例年であれば前日までにやり終えているはずの最後の荷造りに忙しく、式の後には別れを惜しむ間もありませんでした。しかし、3月11日の下校時に地震に遭い、ともに励まし合い協力し合う経験をした卒業生の間には、何にも勝る強い絆が結ばれていることと思います。

これからも、それぞれの将来の夢に向かって、お互いを高め合いながら一歩一歩進んでいくよう願っています。

●日本漢字能力検定

平成22年度の日本漢字能力検定において、東京女学館小学校が2万あまりの団体の中から、最優秀団体賞を受賞しました。

本校では5年前から、日本漢字能力検定を日々の漢字学習の成果を発揮する場として学校行事に位置づけ、取り組んできました。

子どもたちは、日々の漢字学習を大切に、自らの目標級を決め、取り組んでいます。

目標級を該当学年の検定級のみならず、相当級以上の級を目標に据え、意欲的に取り組む子どもたちもいます。今回のこの受賞は、日々の子どもたちの努力の成果だと思います。この受賞が、さらなる子どもたちの意欲喚起につながり、一層の伸びを支えるものとなることを期待しています。

入学式

4月12日、青い空のもと、東京女学館小学校の入学式が行われました。桜の花も、1年生の入学を待っていたかのように満開になり、共に入学を祝っているようでした。

入学式では、お姉さま方から「ご入学おめでとう」の歌をプレゼントしてもらい、みんな目を輝かせて聞き入っていました。舞台に上がって一人ずつ名前を呼ばれると、元気よく手を挙げ、講堂中に響き渡る大きな声で返事をしていました。女学館小学校の一員になれた喜びが、伝わってくるようでした。

「困ったことがあったら、何でも聞いてくださいね。」というお姉様の言葉に安心し、また、期待を膨らませた1日となりました。

行事予定

4月 8日（金）	1学期始業式
4月12日（火）	入学式
4月18日（月）	全校健康診断（身体計測）
4月19日（火）	全校健康診断（各科検診・視力）
5月21日（土）	運動会
5月31日（火）～ 6月 3日（金）	4・5年生校外学習
6月 9日（木）	1・2年生合同遠足
6月19日（日）	全校日曜参観日・保護者勉強会
6月29日（水）～30日（木）	鎌倉建長寺（6年）
7月 7日（木）	1・2年生七夕まつり
7月16日（土）	1学期終業式
7月18日（月）～28日（木）	海外研修（オーストラリア）
7月19日（火）～22日（金）	イングリッシュキャンプ（君津）
7月19日（火）～26日（火）	プール開放
8月 2日（火）～ 5日（金）	軽井沢クラブ合宿1期
8月 5日（金）～ 8日（月）	軽井沢クラブ合宿2期
8月20日（土）・21日（日）	私立学校展国際フォーラム

中学校生徒会長抱負

こんにちは。生徒会長の齋藤麻椰子です。
昨年に引き続きバスマナー、あいさつ運動、食堂マナーを中心に活動していきます。特にあいさつに力を入れ、多くの人が気持ち良く毎日を過ごせるように努力していきます。
また、東日本大震災への復興支援もボランティア学習委員と協力して行っていきます。
皆さまの学校生活が充実した毎日になるよう、執行委員と共に活動していきたいと思いますので、一年間よろしくお願いいたします。

中学校入学式

4月8日（金）中学校入学式が行われ、258名の新入生が入学されました。

中1遠足

中1は4月27日（水）千葉県の野田にある清水公園に遠足に出かけました。風は強かったものの晴天に恵まれ、園内狭しと走り回って身体を動かし、ターザンロープ、アリ地獄、ネズミ回しなどユニークで楽しいアスレチックにどんどん挑戦しました。昼食後は花ファンタジアを回り、色とりどりに咲き乱れる花々を見て春を満喫しました。また、風で次々に池に帽子を飛ばされ、管理人さんに網ですくっていただく一コマもありました。往復のバスでも、文化委員が趣向を凝らしたクイズやビンゴなどで盛り上がり、クラス皆が笑顔で過ごし、思い出深い一日となりました。

中2遠足

4月27日、中学2年生は遠足で武蔵丘陵森林公園に行きました。前日まで雨天の予報でしたが、生徒達の願いが通じてか、当日はさわやかに晴れわたり、絶好の遠足日和となりました。ちょうどハナミズキやポピーが満開の園内を散策した後、運動広場でクラス毎にドッジボールや鬼ごっこをして親睦を深めました。同じ広場にある「ポンポコマウンテン」というドーム型トランポリンも生徒を魅了していたようです。例年より短いコースでの実施となりましたが、良い思い出を作ることができました。

中3遠足　多摩川ウォーキング

中3の今年の遠足は、このたびの大地震とその後の状況を受け、例年の目的地を変更して、以前本校で「強歩」として実施していた多摩川沿いの長距離歩行を行いました。
低気圧の影響で南風が強かったものの、天気はよく歩くにはちょうどよい日和でした。多くの生徒は10kmという距離を歩いた経験はなく、歩くまでは不安もあったようですが、いざ歩き始めると友達といろいろな話をしながら、元気よく歩き通せたと思います。
長い人生の中で、いざというときには一つの経験として自信につながることもあるかと思います。心地よくからだを使えた半日でした。

高等学校生徒会長抱負

こんにちは。生徒会長の相野谷美理です。
挨拶の推進や食堂の使用ルール見直し、バスマナーの問題に取り組んでいますが、今年度は学校内でのマナー全般の向上についても力を入れたいと思います。
また、東日本大震災の被災地復興支援の活動も、ボランティア学習委員会と生徒会がタイアップして全力で取り組んでまいります。
生徒会長として、充実した話し合いを心がけますので、一年間よろしくお願いします。

高等学校入学式

4月7日（木）高等学校入学式が行われ、246名（うち外部生6名）をお迎えしました。

平成23年度　中学校・高等学校入試結果

	志願者	受験者	合格者	実質倍率	入学者
●中学校 一般学級					
2月 1日	229	201	97	2.1	80
2月 3日	548	296	93	3.2	65
本校小学校					69
●中学校 国際学級					
12月18日 帰国生	57	53	36	1.5	14
2月 2日 一般生	220	161	34	4.7	25
本校小学校					5
■高等学校（一般コース・国際コース）					
1月22日 推薦	4	4	4	1.0	4
2月11日 一般	14	13	9	1.4	2
本校中学校					240

平成24年度より高校の募集は行いません。

行事予定

4月 7日（木）	中学始業式、高等学校始業式・入学式
4月 8日（金）	中学入学式
4月27日（水）	中学遠足、高校球技会
4月28日（木）	中学球技会、高二・三遠足
5月23日（月）	高二中間試験
5月24日（火）～26日（木）	中間試験
5月27日（金）	高校中間試験、中学総合学習
6月11日（土）	オープンスクール(午後)
7月 2日（土）	高二期末試験
7月 4日（月）～ 7日（木）	期末試験
7月13日（水）	答案返却日
7月19日（火）	終業式

中国近代史研究の現況と私

大学教授　藤谷 浩悦

2010年は、東アジアは、尖閣諸島を含む領土問題、中国での「反日」暴動など、緊迫した雰囲気に包まれました。折りしも、同年は「韓国併合」100年にあたりました。このため、日本の出版界では、東アジアの過去を総括し未来向けた新たな枠組みを模索すべく、また2008年の北京オリンピックを終えて躍進著しい中国の歩みを振り返るべく、二つの大きな企画がなされました。一つは『シリーズ二〇世紀中国』全4巻（東京大学出版会、2009年）の出版、他の一つは『岩波講座東アジア近現代通史』全10巻、別巻1（岩波書店、2010年）の出版です。

前者は、1945年以降、中国近現代史に関する2回目の本格的な講座になります。前回は、1978年、すなわち中国の文化大革命の終了を受けた時期に出されました。ここで注目されたのは、1978年の講座の執筆者が、2009年の講座では全て選から外れるという、世代交代の激しさでした。私は、同講座の第1巻「中華世界と近代」に論文を執筆しました。それでも、同講座の第1巻の執筆者の中では、二番目の年長でした。なお、同講座は、中文版、英文版でも翻訳の上出版されます。

後者は、岩波講座では、初の東アジアの近現代史に特化した講座です。現在、グロバリゼーションの進展がナショナリズムを刺激し、あちこちで摩擦と紛争が起きています。そして、ナショナリズムの多くが、歴史認識に起因しています。東アジアも例外ではなく、また日本が複雑にからんでいます。ここに、2010年という節目の年に、同講座が編まれた理由があります。私は、同講座の第3巻「世界戦争と改造」に論文を執筆しました。この論文は、各方面から高い評価をいただきました。

今年は、東アジアで最初の共和制国家が樹立された、辛亥革命の100周年にあたります。日本の東京では12月3日と4日に国際シンポジウムが開催されます（詳細は、辛亥革命百周年日本会議のホームページ、http://www.shingai100japan.jp/を参照してください）。私は、第3分科会「地域からみる清末民初という時代」のコメンテーターとなりました。同シンポジウムの特徴は、世界の研究者が一同に会すると共に、老・壮・青の各世代の研究者が全面的に参加しながら、若い世代、特に30代、40代の研究者を国際舞台の前面に押し出そうとしている点です。

私の研究の特徴は、中国近代史を対象としながら、個々の歴史的事象について、後の時代に様々な思惑から付されたイメージを解きほぐしつつ、出来事の裏側に張り付いている意味を解き明かし、新しく解釈し直そうとする点にあります。膨大な量の史料の読解と共に、感性の錬磨が勝負どころとなります。現在、各国の多くの歴史研究者が、新しい歴史認識の構築と実証研究を必死に行っています。私も、微力ですが、歴史研究者の一人として何らかの形で貢献できればと思っています。

大学認証評価で「認定」の判定を受ける

本学は、2010年度に日本高等教育評価機構の認証評価を受け、首尾よく「認定」の判定を受けました。

大学の認証評価制度とは、2004年度から学校教育法の改正により始まり、すべての大学、短大、高専は、教育研究水準の向上を目的として、教育研究、組織運営、施設設備などについて文部科学大臣が認証する評価機関による評価の義務を負うようになったものです。評価機関には、大学基準協会、日本高等教育評価機構、大学評価・学位授与機構の3つがありますが、本学は私立大学が多く集まっている日本高等教育評価機構に加盟しています。同機構は11の評価基準とそれぞれの基準の項目を設定しており、建学の精神・基本理念、教育研究組織、教育課程、学生、教員など多岐にわたります。

本学は、2010年度に同機構の認証評価を受けること決まった後、2009年6月に、自己点検委員会を発展させた、本学の教職員から成る認証評価チームを発足させ、準備を始めました。自己点検委員会は、本学の評議会に下に置かれ、大学全体の活動の自己評価、そして学外の第三者による本学の認証評価に関する事項などを担当しています。毎年各委員会（本委員会も含めて）や部署に自己評価を依頼し、次年度にそれらの結果を報告書としてまとめています。報告書を作成することにより、改善すべき点、変更すべき点が明らかとなり、次年度以降に反映されます。これらの自己点検報告書は、7年をサイクルとして行われる外部機関による認証評価の際に重要な資料となります。2004年度から2007年度の報告書は図書館に置かれ、2008年度・2009年度版は本学ホームページ上で公開されています。

認証評価に向けた主な作業としては、2010年度に入り、本学の自己評価報告書（本編・データ編・資料編）の6月末提出、報告書に対する評価員（他大学の教職員4名）の書面質問への回答の9月末提出を経て、11月17日・18日の2日間実地調査（写真）を受けました。年明けには評価員による認証評価報告書が本学に送付され、その後数回のやり取りの中で、本学の意見も取り入れながら最終版にまとめられ、2011年3月31日に認証評価の結果が同機構のホームページを通じて一般に公表されました。2010年度に受審した大学89校（本学を含む新規85校＋再評価4校）については、新規のうち75校認定、9校保留、1校不認定となり、再評価分はすべて認定となりました。

これからは、今回の認証評価で指摘された様々な課題に取り組んでいくことが必要となります。今回の受審に際しては、学校法人をはじめ大学の教職員の多大なご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（上別府隆男）

ホテルでワークショップを開催

就業力育成プログラムの一環で、企業での実体験研修として、一流ホテルでの講義、施設見学、宿泊、接客体験、課題へのプレゼンを行いました。ロイヤルパークホテル、アグネスホテル東京にそれぞれ10名の学生が参加しました。

人形町にあるロイヤルパークホテルでは、4日間研修を実施しました。講義では主にホテル業界の基礎知識、また接客するうえでの心構えを学び、業務体験では、ユニフォームに着替え宴会サービスを体験しました。また、ホテルで活躍している先輩ホテリエとの会談を通し、実際の仕事内容や就職活動時の体験について生の声を伺いました。

ロイヤルパークホテルにて

4日間の研修を通して、「女子大卒業パーティの新企画」についてグループで話し合い、最終日に発表を行いました。積極的に意見を出し合い白熱した議論のすえ、ホテル側が目を丸くするほどの企画を提案しました。その中でも、人形町の老舗和菓子屋とコラボレーションをして和菓子を提供するといった、地域の活性化に貢献する案が大好評でした。

神楽坂にあるアグネスホテル東京では、3日間、ホテルツアーや神楽坂ツアーを通してホテリエとしての基礎知識を学習しました。実務体験として、エステサロンでのレクチャーやハウスキーピングを行いました。シーツや枕カバー、テーブルクロスの折り目を見ただけで上座、下座が分かるというお話に、学生も熱心に耳を傾けていました。3日間の研修を通して、「母と娘の休日プラン」の発表を行いました。フランス人の多い神楽坂という立地を活かし、フランス語で母の日を祝うことを意味する“la fête des mères”プランを提案し、母の日に因んで価格を8万8千円とするなど、面白い案がたくさん出ました。

アグネスホテル東京にて

この研修に参加した学生の中には、「表に見える華やかな場面だけでなく裏側の大変な部分を知ることが出来て良かったです。より一層ホテルで働きたくなりました。」という声や「興味の無い企業でも、触れてみると意外な点や知らなかった点を見つけられて視野が広がりました。」という声がありました。皆それぞれに色々な思いを得てこの研修を終了したようです。

（高田麗子）